

# 大正期の子供服の様相

－林愛作の家族写真を例に－

武庫川女子大学生生活環境学部生活環境学科助教 池 田 仁 美

## 1. はじめに

武庫川女子大学生生活美学研究所による平成 29 年度第 2 回甲子プロジェクト研究会（2017 年 10 月 30 日於甲子園会館）において、甲子園ホテルの常務取締役兼支配人であった林愛作（1873-1951）の御令孫である林裕美子氏を講師にお迎えし、「祖父・林愛作のこと」をテーマに主に大正期から昭和初期の林愛作のご家族の写真を拝見しながら当時の様子を伺う機会を頂いた。裕美子氏の父である林陸郎は、林愛作と妻タカの四男で、大正 8（1919）年に生を受けた。

今回拝見させていただいた林愛作の家族写真は、大正 6（1917）年に駒澤に完成したフランク・ロイド・ライト設計による自邸（朋来居、現・電通「八星苑」）で撮影したものが大部分を占める。朋来居の建物を背景に、洋装の林愛作の腕に抱かれる幼い陸郎の写真に写る様子（図 1）からは、当時の愛作の生活スタイルを垣間見ることができた。大正期の暮らしの 1 シーンを切り取った写真には、現代の生活と重ね合わせられる部分もある。一家の写真には、洋服を身に纏う妻タカや子供たちの姿も残されている。林家は、仕事柄、諸外国の客人を迎える機会を持つこともあった。洋装のドレスと帽子を身に纏った欧米人風の女性とフロックコートや背広姿の男性、和服姿の女性が庭先でテーブルを囲む写真も残されているがその写真からは、欧米の文化が身近にあり、柔軟に受け入れていた様子が見てとれる<sup>1)</sup>。一般家庭よりも外国文化に触れる機会が遙かに多かったことから、ある意味特殊な家庭環境であったことが想像できるが、そのような家庭において、どのような衣生活が営まれていたのかは非常に興味深い。そこで、本稿では婦人服に先行して洋装化が進行した子供服に着目し、大正 8（1919）年から大正 15（1926）年頃にかけて撮影された林愛作一家の写真から着衣の特徴を読み解くことを試みた。

## 2. 子供服の洋装化

明治の開国を経て、日本人の身装文化に洋装が取り入れられるようになった。明治初期からの洋装化は、上流階級から職業服、紳士服、子供服、婦人服へと戦後の復興期にかけて徐々に進行していった。着心地と機能性を重視する子供服は、雑誌や新聞における製作記事や広告、学校や新聞社が主催する裁縫講習会の告知記事に見られるように、家庭での洋服製作を前提にして受容されていった。大正 6（1917）年に発刊された家庭生活情報を中心に掲載した雑誌『主婦之友』は、大正期から昭和期にかけて子供服の型紙の作成と仕立て

方の記事を掲載するとともに、代理部で子供服を販売しており、村田（2004, 2010）は、『主婦之友』が一般家庭における子供の洋服の普及に貢献していたとしている<sup>2-3)</sup>。村田（2004）の調査では、『主婦之友』で子供服の仕立方が掲載された子供服の記事は大正 10(1921 年)以降に増加しており、この時期は、林愛作一家の写真が撮影された時期と重なる。

子供服の洋装化の過程については、東京家政大学の前身である和洋裁縫伝習所、東京裁縫女学校、東京女子専門学校の教育課程で製作した裁縫雛形に見ることができる。裁縫雛形を使用した裁縫教育方法は渡辺辰五郎によって考案され、実寸より小さいサイズで製作することで習得の早さや材料費の双方で効率的に多くの教程をこなすことを目的としており、貴重な実物の雛形資料群は、国の重要有形民俗文化財として東京家政大学博物館が所蔵している<sup>4)</sup>。三友（2009）は、子供服の雛形を明治期から大正期にかけて年代ごとに服種や形状を整理することで、その変遷を捉え、各年代を象徴するデザイン要素があることをつきとめた。特に、大正前期はフリルやレース、リボンなど過度な装飾が目立ったが、大正 7(1918)年頃からローウエストの直線的なシルエットのシンプルなデザインに変化したことを指摘した<sup>5)</sup>。

子供洋服の普及の背景には、既製の学生服が製造・販売されたことも関連しており、男子の詰襟学生服や女子のセーラー服が挙げられる。小学校ではこれらの学生服の着用は義務づけられなかったが、機能性や衛生面、経済的な条件を備えていることから、子供の洋服着用の普及と進展につながった<sup>6)</sup>。

子供服の洋装化については、裁縫教育文献資料や写真資料、実物の雛形資料などを用いた研究が進み、需要と普及の過程を明らかにされつつあり、いずれにおいても洋服が子供の成長に適切な衣服であると判断した主婦層の支持が不可欠であったといえる。

### 3. 林愛作一家の暮らし

林愛作・タカ夫妻と五男三女の一家は、日比谷の帝国ホテル内に住み、週末や夏休みに自動車に乗って駒澤の朋来居に通っていたという<sup>7)</sup>。朋来居で過ごした一家の様子は読売新聞の記事になり、一般層とは異なる暮らしぶりに関心が寄せられた。特に、大正 13(1924)年 12 月 15 日号<sup>8)</sup>、大正 14(1925)年 1 月 3 日号<sup>9)</sup>、大正 15(1926)年 1 月 5 日号<sup>10)</sup>に掲載された記事は“雪の時節が近付くと令息令嬢を連れてスキー場へ急がれます”（読売：1924. 12. 15），“二令嬢はお母さんのお仕込みだけになかなか愛嬌のある少女です。両親を初め兄さん達が皆熱心なスキーマンなので、二人もスキー場へ行く日を楽しみに待っています”（読売：1925. 01. 3）というように、いずれも一家がスキーを楽しんでいることを伝える内容で、スキーの愛好家であった愛作の一家の余暇に関心が集まっていたことが窺える。林愛作一家の暮らしの様子は、“大正期の都市中産階級の文化生活”（読売：1989. 11. 06）と表現されている。同紙のインタビューで長女（当時 74 歳）は、当時の暮らしを振り返り、週末や夏休み、自動車に乗って“別邸”に通った折、園遊会で蓄音機から流れる調べにのっ

て、外国人も混じって着飾った男女がダンスに興じていたこと、隣接する農園で西洋野菜が栽培されていたこと、飼っていた七面鳥や豚の餌として帝国ホテルの馬車が毎朝残飯を運んで来て、代わりに新鮮な卵や西洋野菜を持って行ったこと、フランク・ロイド・ライトのピアノが上手だったことなどを語った<sup>7)</sup>。一般家庭よりもはるかに多く外国文化と接する機会が多かった一家は、衣食住の生活環境において、ごく自然に外国文化を受容していたことが想像できる。

#### 4. 林愛作の家族写真と着衣

本稿で用いる写真資料は、林裕美子氏が所蔵し、閲覧させて頂いた家族写真のうち、陸郎や兄姉が写っている写真 6 枚である。いずれも、大正 8(1919)年から大正 14 (1925) 年頃に撮影されたものと思われる。兄姉の通学していた学校名の情報は林裕美子氏からご提供いただいた。写真の撮影年が明記されていないものについては、被写体である子供たちの成長を年代推定の拠り所とした。

6 枚の写真に写った人物の着衣に目を配ると、図 1 は、洋装の林愛作に抱かれる生後間もない頃の陸郎である。洋装の愛作と対比するように陸郎は和服地の衣服の首元にはレースのよだれかけを掛けている。

図 2 は、陸郎が産まれた大正 8(1919)年の写真で、左から長男、母タカに抱かれた陸郎、三男、長女、次女、次男の姿を見ることができる。長男は、東京高等師範学校附属小学校（現、筑波大学附属小学校）の制服を着用し、白い房のついた三角にとがった形の学生帽をかぶっている。房の色は、高学年が白で、低学年が赤であった。下衣は膝丈のズボンを着用し、足には靴を履いている。タカは、濃色を基調とした縞の着物に格子柄の帯を締めている。陸郎の着衣については写真から詳細を把握することが困難であるが、縞の袖なし半纏の下に袖丈の長い衣服を身につけていることから、和服であることが推測できる。三男は洋服を着用しており、大きな角衿のフラットカラーと正面の左右にボタンが並ぶ上衣に腰ベルトをつけ、下衣は膝丈のズボンを着用している。また、薄色のふくらはぎ丈の靴下、靴を履いている。上衣のボタンの位置からダブルの打合せのように見えるが、左右の身頃の重ね合わせ部分がないため、飾りボタンであったと考えられる。長女は、ワンピースを着用しており、丸衿のフラットカラーで、胸部には 2 段のギャザーを寄せてある。身頃との接合部分はタックのあるギャザーで、膝が隠れる丈のスカートである。ベルト布が付いているが、緩くヒップ位置に垂れ下がっている。足元は、薄色の長靴下に濃色のストラップ付きの靴を履いている。次女は、薄色を基調とする縞の着物に濃色の被布を着ており、足元は鼻緒がないことから靴を履いているようである。暁星小学校に通っていた次男は薄色で折襟の学生服を着用し、折襟の左右には記章を付けている。下衣は足首までの丈のズボンに靴を履いている。学生帽は白で正面に記章がついている。次女だけが着物姿であった理由は不明であるが、3 歳であったから、祝い事などがあったのかもしれない。

図3は、左から長女、タカ、三男、二男、愛作、陸郎、後列に長男が写る写真である。愛作は、洋装でハンチング帽を被り、上衣にはジャケット、シャツ、ネクタイ、下衣には丈の短いニッカーボッカーを着用している。これは、当時のゴルフ服の特徴と重なる着衣である。ゴルフに興じていた一日に撮影された家族写真であったのだろうか。タカは、縞の着物に市松模様の帯を締めている。襟元はゆったりと合わせ、おはしよりも厚く長くとっている。図2の着物と酷似しているが、縞の配色が一部異なっている。現代に見るように補正と正確な着装を重視する着付けとは異なり、日常生活の和服の装いを見る事ができる。長女は洋装で、白の角型のフラットカラーが印象的な長袖の濃色のワンピースを着用している。胸元には直線的な構成の模様がついており、装飾性の高いデザインである。長男は図2と同じ学生帽に黒色で立襟の学生服を着用している。写真を撮影したのが冬服の着用時期であったのだろう。次男は黒色で折襟の学生服に黒色の学生帽を被っている。図2と色は異なるが、形状は同じものである。三男は、フリル状の白い衿のついた上衣と下衣の分かれた洋服を着用しているが、鮮明に写っていないため、詳細は読み取る事ができなかった。陸郎の着衣は、濃色と薄色の柄があり、袖口が手首よりも大きな筒状になっていることから和服であることが推測できるが、こちらも詳細は読み取る事ができなかった。

図4は、紋付羽織袴姿の愛作と、小花柄の着物に洋髪のタカ、次女と陸郎が写る写真で、全員和服姿である。次女は華やかな祝い着に被布を身につけ、陸郎は紋付の着物を身につけている。七五三などのあらたまった祭事の記念写真であろうか。図2～図6の写真の中では、唯一全員が和服姿の写真である。

図5は、左から三男、陸郎、タカ、五男、次女、長女の写る写真である。三男は次男と同じ暁星小学校に通っており、図3で次男が着用していたものと同じ折襟の学生服に丈の短いズボンを履いている。林裕美子氏によると、低学年のズボンは、ニッカーボッカーが制服となっていたとのことである。陸郎は、丸襟のチェック柄の長袖シャツに丈の短いズボンを履いている。下衣のズボンは上衣のボタンにかけられており、ずり落ちないようにになっている。タカは小菊柄の着物姿に洋髪で、月齢の小さい五男を抱いている。五男は図1の陸郎と同じように和服にレースの涎掛けを付けている。次女は、九段精華小学校に通っており、写真では制服のセーラー服を着用している。長女は、別珍のような毛足の長い布地に特有の光沢感のある素材で、ウエストには共布のベルトのついたワンピースを着用している。長女は東京女子高等師範学校附属小学校（現、お茶の水女子大学附属小学校）に通っていた。この写真は、制服ではなく私服である。

図6は、前列左から長女、次女、陸郎、五男、タカ、後列左から三男、長男、次男が写る全員が洋装の写真である。大正8(1919)年に産まれた陸郎の年の頃から判断すると、大正15(1926)年前後に撮影された記念写真であろうか。長女、次女、陸郎、五男は全員お揃いの白を基調としたセーラー型上衣を着用している。衿の後部とカフスは薄い色で、三本の白いラインが入っている。下衣は、長女・次女は白の襷スカートで、陸郎は白の長ズボン、五男は白の半ズボンを履いている。四人のセーラー服は私服である。次男は進学し、折襟で





図1 愛作に抱かれて 大正8(1919)年



図2 母タカに抱かれて 大正8(1919)年



図3 駒沢の家 家族と共に



図4 両親と一緒に



図5 駒沢の家でタカ兄姉と



図6 タカ兄姉と

薄色の暁星中学校の学生服を着用している。三男は、暁星小学校の学生服で、同中学校の制服とはボタンの数が異なっていたことがわかる。暁星小学校の学校制服はフランス海軍の軍服をモチーフにしたという<sup>11)</sup>。学習院中学校に進学した長男の学生服は、次男、三男とは異なり、ボタンがなく立襟の詰襟学生服である。タカは、細かなプリーツが何本も入り、共布のくるみボタンが襟元から裾までついた装飾性の高い半袖のワンピースを身に纏っている。

図 1～6 の写真では、幼児期の男児は洋服を身につけ、就学後は学生服を着用していた。

## 5. 子供服の特徴と流行

写真資料の子供服のうち、着衣の全体像がわかるものをハンガーイラストにし、子供服の特徴を図 7 に示す。(A)～(B) は男児服、(C)～(E) は女児服である。

同年代の新聞に掲載された子供服に関連した記事に目を向けると、(C)のワンピースの白い衿や、(B)、(E) ベルトの着いたデザイン、(B)、(C)、(D)の釦の配置、(D)、(E)のスカートの襞やギャザーなど、これらの子供服の特徴には、当時の子供服の流行として紹介された内容と共通する部分があった。大正 6(1917)年 2 月 25 日の読売新聞「春の子供服-男女とも一般に瀟洒なのが流行-」<sup>12)</sup>の記述では、“型は従来のやうに手の込んだものよりは一体に小さっぱりしたのが流行で、ベルトも上がり

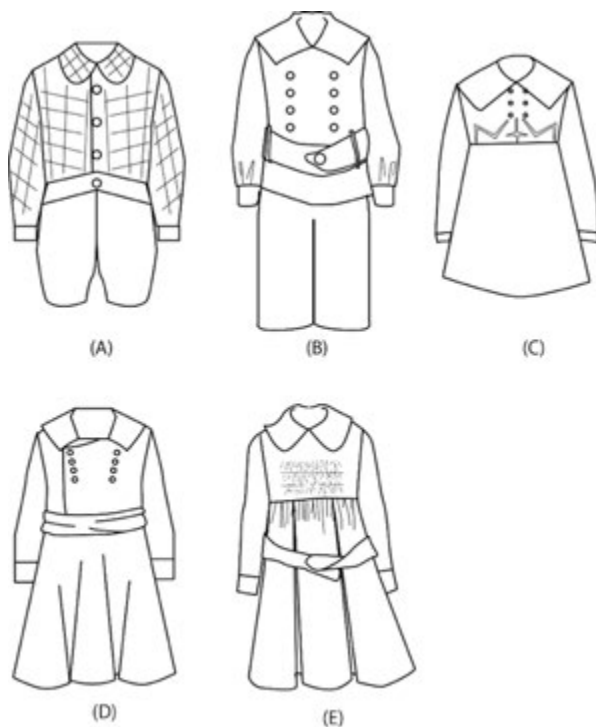


図 7 着衣のハンガーイラスト（筆者作成）

り気味になり、前で合わせ方も以前とは変わり取りはづしも自由に出来るやうなつて居ります”とある。また、大正 7(1918)年 3 月 18 日の読売新聞の「お子供衆の春の洋服-お嬢さんのは襟の返りが丸く-」<sup>13)</sup>の記述では、“五歳から八歳までのお嬢さん向きとしては、白いカラから下の胸の打合せを菱形に取って、角紐釦を三つか四つ附けたもの”，“八歳から十三歳までの学校へ上がつてゐる年頃のお嬢さん向きとしては胸から裾へかけて「三本襞」をとったものがよろしく。”とあった。これらの記事から過剰な装飾を控える傾向があったことは把握できるが、腰にゆるく巻かれたベルトは残っていた。(B)、(E)はとくにゆとり量が多く、デザイン面以外でのベルトの必然性については疑問が残る。衣生活の近代化

を提唱した尾崎芳太郎は、『新しい子供服の裁縫』で次のように述べている。

子供は日々発育するものですから、窮屈では発育を害し、又程なく着られなくなります。それで少々大きいくらいに布取りをしておき、ふんわりと仕立て肩揚げをし、肩をしつくりと合せて、胴はバンドで飾り腹部を締めなやうに、適度に飾り帯として、自由にギャザが寄るやうにします。ギャザのあるのは中々無邪気で可愛らしいものです。これは作った其の年は大きいやうでも、次の年は丁度よくなり、その次の年は多少我慢をするといふ程度になります。かういふ風に仕立てれば三ヶ年くらいは1着の洋服ですまされます。そこで「洋服もいいが直に着られなくなるから・・・」という心配はなくなります<sup>14)</sup>

和服の場合には子供の成長に合わせて縫い直すことで、サイズの変化に柔軟に対応し、長期的な衣服生活が可能になっていたが、洋服は形状が決まっているために、着用できる年数が限られた。そこで、対応策として取り入れられたのがギャザーであり、ベルトであったのがわかる。一見すると、デザインを重視し、機能を果たしていないように見えるが、長く着用するために取り入れられた可能性が示唆された。もちろん、林愛作の一家が上記の効果を必要としていたのかは言及できないが、林愛作の一家の流行を取り入れた子供服の着こなし方の背景に、洋装化の流れの一端を読みとることができたことは大変興味深い。

## 6. おわりに

資料の写真が撮影されたのは子供の洋装化の黎明期であったが、欧米文化に親しみ、文化的でモダンな都市生活を営んでいた林愛作の子供たちの写真には、洋服を着用した姿が多く残されていた。今回の考察では、これらの衣服の入手方法や、構成などの考察には至らなかったが、林愛作一家の衣服生活を知することは、洋装化の先鋭的な流れを汲み取る為の重要な調査活動につながると思われる。今回残された課題に引続き取り組みたい。

## 謝辞

貴重な写真を本稿に掲載させていただくとともに、情報をご提供くださいました林裕美子氏、多大な示唆をくださいました武庫川女子大学黒田智子教授に心より感謝申し上げます。

## 【注】

- 1) [写真]
- 2) 村田裕子 2004「大正期における洋装子供服について－雑誌『主婦之友』より－」『大谷女子短期大学紀要 48 号』大谷女子短期大学部 pp. 31-42
- 3) 村田裕子 2010「昭和初期における子供洋服－雑誌『主婦之友』より－」『大谷女子短期大学紀要 53 号』大谷女子短期大学部 pp. 16-33
- 4) 東京家政大学博物館編 2001 『重要有形民俗文化財渡辺学園裁縫雛形コレクション』上巻・下巻 東京家政大学博物館
- 5) 三友晶子 2009「裁縫雛形にみる子供服の洋装化の過程」『東京家政大学博物館紀要第 14 集』 pp. 167-185
- 6) 難波知子 2016 『近代日本学校制服図録』創元社
- 7) 読売新聞 1989. 11. 06「[建築懐古録] 電通「八星苑」(旧林愛作邸) モダンな“文化生活”今に」朝刊 27 頁
- 8) 読売新聞 1924. 12. 15「美しい姿をそろそろスキーの赤倉へ 林愛作氏夫人たか子さん」朝刊 11 頁
- 9) 読売新聞 1925. 01. 03「春のどか スキーの日を待つ林愛作氏の可愛い二令嬢」朝刊 4 頁
- 10) 読売新聞 1926. 01. 05「スキーに凝る林氏の夫人 雪の精のように美しい七人のお母さん」朝刊 3 頁
- 11) 暁星小学校 暁星のあゆみ  
<http://www.gyosei-e.ed.jp/newhp/pages/ayumi.htm>(2018. 02. 23)
- 12) 読売新聞 1917. 02. 25 [婦人付録] 春の子供服 男女とも一般に瀟洒なのが流行」朝刊 4 頁
- 13) 読売新聞 1918. 3. 18「[婦人付録] お子供衆の春の洋服 お嬢さんのは襟の返りが丸く」朝刊 4 頁
- 14) 尾崎芳太郎 1925『新しい子供服の裁縫：用布節約裁方図解』実業之日本社 P201



付図 1 赤坂邸にて明治 44 (1911) 年

## 【参考文献】

- ・ 大丸弘・高橋晴子 2016 『日本人のすがたと暮らし 明治・大正・昭和前期の身装』三元社
- ・ 読売新聞 1916. 11. 21「[婦人付録] 清楚な子供服 格好のよい剣型」朝刊 4 頁
- ・ 読売新聞 1921. 09. 12「小学児童や女学生に洋服流行の趨勢 然し服地の値段の関係



で」朝刊 4 頁

- ・ 読売新聞 1922. 7. 22 「流行る子供服」東京夕刊 2 頁
- ・ 読売新聞 1922. 5. 30 「一番喜ばれる水兵型 簡単に嫌味のない子供の夏服」朝刊 4 頁
- ・ 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館「身装画像データベース<近代日本の身装文化>」子供夏服 三越（三越）P20 1922 年 ID No. X01-158 <http://shinsou.minpaku.ac.jp/> (2018. 03. 05)
- ・ 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館「身装画像データベース<近代日本の身装文化>」春向きのお子供服 三越（三越）P13 1919 年 ID No. X01-160 <http://shinsou.minpaku.ac.jp/> (2018. 03. 05)
- ・ 鳥居本幸代 1999 「大正浪漫期の子供ファッションー『土井子供くらし館』所蔵品から (Part8 ワンピース) ー」『繊維製品消費科学』Vol. 40 No. 11 pp18-22
- ・ 鳥居本幸代 1999 「大正浪漫期の子供ファッションー『土井子供くらし館』所蔵品から (Part9 セーラー型子供服) ー」『繊維製品消費科学』Vol. 40 No. 12 pp12-15